

門出

①男もするる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

②その年の十二月の二十日余り一日の日の戌の時に、門出す。③そのよし、いさかにものに書きつく。

④ある人、県の四年五年果てて、例のことどもみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる。⑤かれこれ、知る知らぬ、送りす。⑥年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつののしるうちに、夜更けぬ。

⑦二十二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。⑧藤原のときざね、船路なれど、むまのはなむけす。⑨上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。

⑩二十三日。ハ木のやすのりといふ人あり。⑪この人、國に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。⑫これぞ、たたはしきやうにて、むまのはなむけしたる。⑬守柄にやあらむ、国人の心の常として、「今は。」とて見えざなるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。⑭これは、ものによりてほむるにしもあらず。

⑮二十四日。講師、むまのはなむけしに出でませり。⑯ありとある上・下、

童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

○用言を指摘し、右側に終止形を記す。

○助動詞を指摘し、右側に意味を記す。見つけたものを活用表に埋める。

帰京

①京に入り立ちてうれし。②家に至りて、門に入るに、月明ければ、いとよくありさま見ゆ。③聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。④家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。⑤「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。」⑥「さるは、たよりごとに、ものも絶えず得させたり。」⑦「今宵、かかること。」と、声高にものも言はせず。⑧いとはづらく見ゆれど、こころざしさせむとす。

⑨さて、池めいてくぼまり、水つける所あり。ほどりに松もありき。⑩五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりにけり。⑪今生ひたるぞ混じれる。⑫おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。⑬思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。⑭船人もみな、子たかりてののしる。⑮かからう中に、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、⑯生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ
⑰とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ、
⑱見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや
⑲忘れがたく、くちをしきこと多かれど、え尽くさず。⑳とまれかうまれ、とく破りてむ。

○用言を指摘し、右側に終止形を記す。

○助動詞を指摘し、右側に意味を記す。見つけたものを活用表に埋める。